形式で、前者には勢至菩薩像と男性供養塔の名、後者には聖観音像と女性三十人の名があります。そのような男女別に対となる供養塔には、同日ではあたりませんが、後者が「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者が「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれていました。同日台には、前者が全て男性十八人、後者に「なつ」など女性十六人の名が刻まれました。
吉橋や麦丸の石塔は、像容の作風や願文の形式、文字もよく似ていることから、同一の石工に二基以上とし発注されたと考えられます。これらの造塔は、そのムラの講として初めての建立であり、費用もかかって大きな事業だったと思われます。なお、江戸前期のムラの講の身分が江戸後期や近代初期の講に移っていったと考えられます。

また萱田には、三面にそれぞれ猿を浮彫りし、右面に「おつる」との地名が当時の位置がダシナ衆と同格であったことも注目されます。

さらに萱田の長福寺には、同一の塔に面を違えて男・女別に名を刻んだ間文九年（一六六九）銘の三層塔があります。さらに萱田の長福寺には、同一の塔に面を違えて男・女別に名を刻んだ間文九年（一六六九）銘の三層塔がありました。

私は、第一層の兎室の扉枠のある三十二夜講に「おつる」など二十四人の女性名が、右面には「おつる」など二十三人の男性名が、裏面には「一結施主」を結施主にせられることになりました。現正門側が裏側で、修理時に表裏逆に据えられたので、わからないと思いません。この頃の萱田には吉橋と同じように、やはり男性の講が二十四夜講、女性の講が日記念仏講であったと考えます。